

---

---

Lord of The Ring RPG リプレイ  
『エメラルドの砦』

作・ACRAP（全千葉演戯向上会）  
リプレイ清書・海保 研

---

---

## 目次

キャラクター紹介.....	3
本編.....	4
第1章 災難な村.....	4
第2章 獅子奮迅.....	7
第3章 補給部隊推参.....	13
第4章 これが野伏の戦い方だ.....	15
第5章 強引な回復と強引な親友.....	19
第6章 騒々しい潜入者.....	25
第7章 結果的に一撃必殺.....	31
第8章 お約束のリミッター解除と大爆発.....	33
次回予告.....	38
シナリオ作成メモ.....	39

---

---

## キャラクター紹介

- ◆ ファラシオン  
エルフの魔術師。とりあえずこの第2部までのリーダーであり主人公格。リーダーの座は多分揺るがないだろう。
- ◆ フドーリン  
ビヨルン族の野伏。野伏らしい事を何一つしていない。
- ◆ バッカニア  
南寇（バイキングもどき）の戦士。他のPCの台詞を取る。頼むから熱血戦士してくれ
- ◆ ジョンドレド  
欠席
- ◆ バラール（NPC）  
プロの野伏。それが全て。
- ◆ アリオン（NPC）  
男ばかりでムサイから用意したエルフの忍びの女の子。恋愛フラグも死亡フラグも立たない。
- ◆ アマーギン（NPC）  
ファラシオンの師匠。邪悪だけど弱い。CV；速水奨

---

---

# 本編

## 第1章 災難な村

マスター「今は、ちょうどアイゼンガルドから脱出したところ」

B「ああ、死ぬかと思った・・・」

マスター「そうそう、そんな感じ。で、ジョンドレドなんだけど、」

ジョンドレドのプレイヤーは諸般の事情により今回は参加できないため、話の辻褄を合わせることにする

ファラシオン「あれ？ジョンドレドどこいったの？」

マスター「ローハンの騎士がジョンドレドを迎えに来た。どうやら、ローハンにオークが出没するようになったので、警備のためジョンドレドも召集されるようだ。」

ファラシオン「(ジョンドレド) 俺の故郷が～」

フドーリン「(ジョンドレド) じゃあ、お湯を沸かしに行ってくるよ(笑)」

マスター「というわけで、ジョンドレドはついていった。」

ファラシオン「早！」

マスター「ボンブリオンはこれについて行ってもいいんだが・・・」

ボンブリオン「じゃあ、ボンブリオンもジョンドレドについていった。」

ファラシオン「お前、俺の従者じゃないのか！？(笑)」

ボンブリオン「従者ってよくわかっていないから。」

マスター「まあ、俺もボンブリオンが着いていけばいいとおもったんだけど、必然性がないんだよね。」

まあ、ともかくついていった。

マスター「さて、ファラシオンが前回ガラドリエルから最後に聞いた情報をまとめるよ。まずは、(映画の通り)サルマンが裏切り、サウロンに寝返って、オークを配下にして何かしているらしい。」

ファラシオン「なんと禍々しい・・・」

マスター「それから、黒い剣についてなんだけど、ガラドリエルも殆ど知らないと言っている。」

ファラシオン「フドーリンが持っているやつか。」

マスター「いや、もう持っていない。アマーギンに取られたよ」

フドーリン「あげただけど(笑)」

マスター「エルフが作ったものではない。ただし、刃に刻まれた文字を解読すれば、何かわかるだろうということです。そこで、ガラドリエルとしては黒い剣をアマーギンから奪回してくださいということになった」

ファラシオン「ふむふむ」

マスター「そこで、ファラシオンが『いいですよ、奪回しましょう。』と既に言っている。」

ファラシオン「え？俺確か前回、『みんなが危ない』と言われて、それだけ聞いて、助けにいかなきやという話だったんだけど・・・気のせいだったらしい。」

マスター「そこで、その後の指示なんだけど前回立ち寄った村があると思うんだけど、そこで一度合流しようということになった。メル村と言うんだけど。」

ファラシオン「誰と？ガラドリエルそこまで出てくるの？」

---

<sup>1</sup> 更に、今回ボンブリオンのプレイヤーも舌を噛み切るばかりで役に立たなかったのでキャラクターを作り直し。ボンブリオンも廃棄。その為の辻褄も合わせてやらなければならない。

---

マスター「いや、ガラドリエルの使いの者と。」

ファラシオン「使いのものは誰？ハルディア君？」

マスター「いや、それは会って見ないとわからないね。」

フドーリン「ヘーキシ！ところで俺、何も持っていないんだけど(笑)」

ファラシオン「ビヨルン族は毛皮があるから大丈夫だよ。」

フドーリン「ああ、もじゃもじゃなんだ」

ファラシオン「途中に村はないのかな。この男に服を買ってやらないとな。これではガラドリエルの御前には出せん(笑)」

マスター「ああ、だからその村で(買えばいいじゃん)。」

ファラシオン「よし。ではその村に向かおう」

ということで、メル村に向かう事になった。馬があるので4日間で到着する。

マスター「とりあえず先に進めておくと、アリの連れていた狼は2日目の朝、目を覚ますといなくなっていた。」

ファラシオン「アリの狼はどこにいった？フドーリン、まさかお前・・・(笑)で、今俺ら二人で旅しているって事なの？」

マスター「そうだけど。」

ファラシオン「二人か、さみしいなあ」

フドーリン「一人は使い物にならないしな」

ファラシオン「何で使い物にならないの？」

フドーリン「武器がないと戦えないんだよ、このルールは」

ファラシオン「今襲われたら大変な事になるなあ・・・」

フドーリン「狼を追跡してみたい？」

二人ともアリの狼を追跡するためのロールを行った。ファラシオンが成功したが狼の方が早く、追いかけることがなかった。

ファラシオン「ダメだ。足跡は発見したが狼の方が早すぎる・・・」

フドーリン「先に進むしかないなあ」

というわけで、2日目。ファンゴルン沿いに進んでいたが、森が荒らされている現場に遭遇する。

フドーリン「切り株？」

マスター「そう」

ファラシオン「こんなひどい事を・・・森の木々を・・・許せん！（怒りに燃えている）」

マスター「多くの木が切り倒されている、並の規模ではない」

ファラシオン「何か証拠を残していないか？犯人は。遺留品とかは？」

フドーリン「じゃあ、もしかしたら斧があるから、探してみようかな。」

ファラシオン「あるかもしれないけど、錆びていると思うよ」

フドーリン「ないよかいいんだよ。」

マスター「ないよかマシの斧がある(笑)。」

というわけで、錆びている斧をフドーリンは拾った。

マスター「この木を切ってあるあたりにはもう誰もいないけど」

ファラシオン「・・・まだ暖かい。(笑)」

---

<sup>2</sup> イリユーヒン、ロシアの選手。『キン肉マンⅡ世』。詳細は次の次の脚注で。あー、面倒くさい

---

マスター「勝手に暖かくしないで欲しいな。(笑)」

ファラシオン「ちなみに、木を切っても暖かくなるわけではないから。(笑)」

マスター「そもそもそういうことだ」

というわけで、兆候だけを残したまま2日が経過する。

マスター「そろそろメル村が見えてきた。夕暮れ頃なんだが、メル村から煙が立ち昇っている」

ファラシオン「それは炊事の煙か？」

マスター「ではない。遠くから見る限り火をかけられているようだ。」

ファラシオン「む？と言ってフドーリンと顔を見合わせる(笑)」

ここで、舞台は少し前のバッカニアに移る。

マスター「さて、南寇の君は武者修行のために旅をしているのだが、メル村という村に滞在していた。そして夕暮れ時、村の西側の方から「オークだああああ！」という叫び声が聞こえる・・・(図1 オーク襲撃中のメル村)」

ファラシオン「お、お、お、オークだあ・・・うわわわ、助けてくれえええ、ガクッ!(笑)」

マスター「村人?(笑)バッカニアはどうする？」

バッカニア「武器、鎧を装着して、「オークはどこだあ！」と叫んで外に出るよ。オークは？」

マスター「村の西側から侵入してきている。村長らしき人が「教会に避難するんだ！」と叫んでいる」

バッカニア「じゃあ「早く教会に避難しろ！」と言って村人を誘導する。俺はオークを牽制するよ」

マスター「さて、ファラシオンとフドーリンは村の遠くからその様子を見ているところ」

ファラシオン「フドーリン！急ぐぞ！」

フドーリン「おう！」

ファラシオン「テテテ、テテテ、テテテ(笑)」

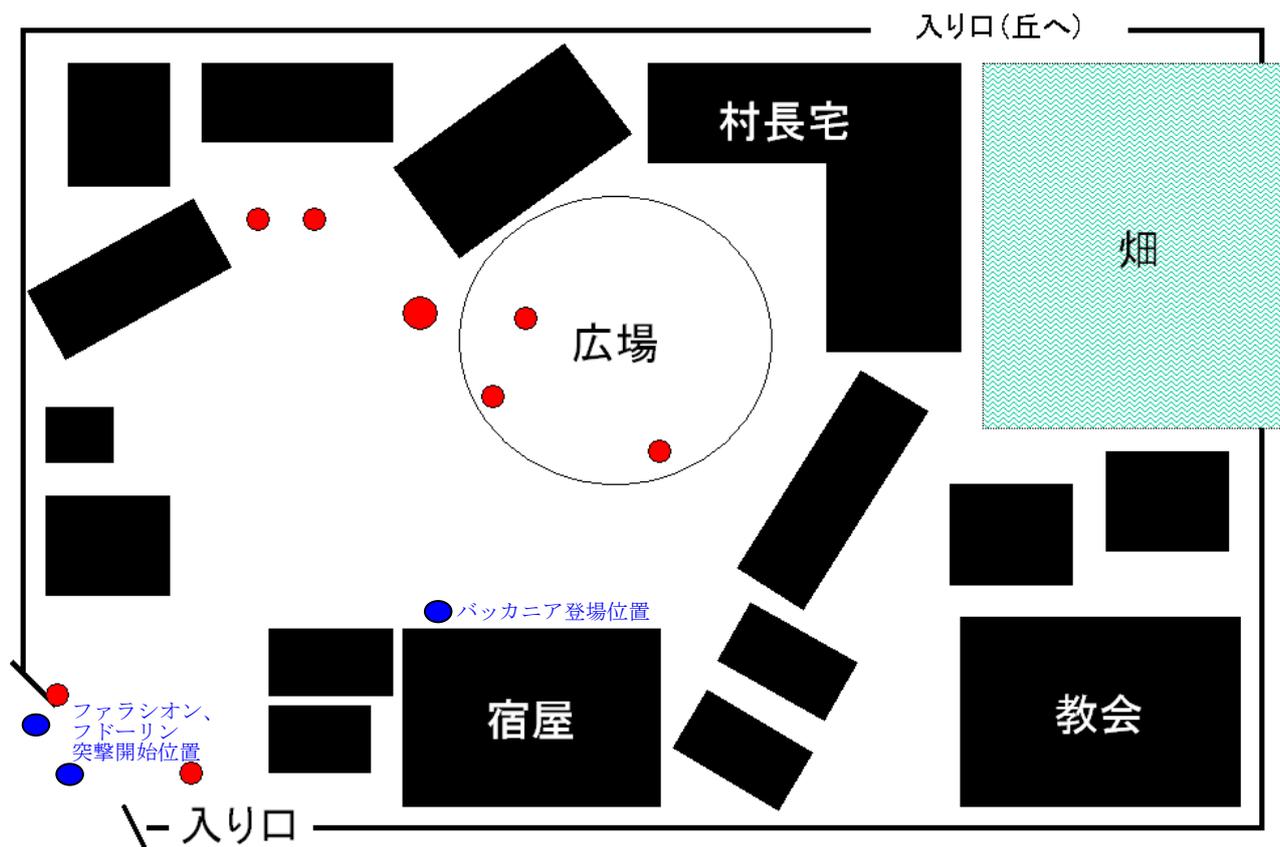


図 1 オーク襲撃中のメル村

## 第2章 獅子奮迅

マスター「10匹以上のオークが攻め入ってきた。」

バックニア「とてもじゃないが一人じゃ太刀打ちできないなあ。」

マスター「オークは村の西側から攻め入ってきて思い思いに略奪している」

バックニア「村人の避難を優先するよ。」

マスター「そうすると、外に出てきたんだけど1匹のオークが向かってきた」

バックニア「オーク如き俺の敵ではない！成敗してくれる！」

オークとバックニアの戦闘が始まる。イニシアチブを取ったバックニアはオークに攻撃し（「この豚鼻野郎が！」）、15点のダメージと痛打を与えて、オークの行動を封じる。そのまま2発目（「うせろおおお！魔界の生き物があ！」）で更にダメージを与えて倒す。

バックニア「他に村人を襲うようなオークはいないか？これで残り9匹だな」

マスター「そうすると、首領らしきオークが向かってきた。オークとは思えないほど屈強だ。」

ファラシオン「まさかあれは・・・」

マスター「「まさかあれは」は早いな。<sup>9</sup>ファラシオンとフドーリンはどうするの？」

フドーリン「どうするファラシオン？「オオオオオック！」とか言いながら突っ込む？(笑)」

ファラシオン「それもいいな。」

ここで音楽を流すが、映画のウルク・ハイ作成中画面。ちょっと重すぎた。

<sup>9</sup> ウルク・ハイ。通常のオークに遺伝子操作を行い、強化したもの。筋力はもちろん知性も上がっている。ホブゴブリンとどっちが強いのかは舞台が違うので比較できない。

---

ファラシオン「オークって1で、ウルク・ハイが2だよな。」

マスター「は？」

ファラシオン「いや、『眠り』の効果が関係しているから(笑)」

バックニア「そのボスオークはこっちの事気がついているのかな？」

マスター「・・・(ロール中) 気がついた。背中から石弓を取り出したよ」

バックニア「石弓か・・・突っ込むよりは物陰に隠れるよ」

ファラシオン「やばい。よし、フドーリン！あっちのデカイ奴を狙え！」

フドーリン「うおお！オオオオオオオオク！(笑)」

ファラシオン「」

マスター「うーん。でもちょっと遠いから2ラウンドかかるぞ」

ここでロードオブザリングのテーマが流れる。(あの颯爽とした曲)

ファラシオン「この曲鳴ったから今着いた。(笑)」

マスター「よし。それ許可(笑)」

フドーリン「助太刀いたす！！」

バックニア「かたじけない！！あのデカイオークをやっつけろ！」

ファラシオン「私は灰色港のファラシオン！(笑)」

バックニア「私は南寇人バックニア！あのオークを頼む。」

フドーリン「心得た！」

マスター「ボスのオークはバックニアには気がついているので、まず配下の3匹のオークが向かってくる」

フドーリン「物陰に隠れて待ち伏せするよ」

フドーリンは<隠れ>のロールを行い。気づかれずに物陰に隠れる事に成功した。

マスター「オークはハンマー、棍棒、爪のそれぞれ3種類の武器を持っている。バックニアに向かってくるよ」

バックニア「じゃあ、こっちは逃げるフリをして引き付けるよ」

マスター「うむ。じゃあ建物の陰に来たところでフドーリンが攻撃するってことだね。」

フドーリン「そう。オオオオオオオク！と叫んで攻撃するよ」

この物陰からのフドーリンの不意打ちによって棍棒のオークは22点のダメージを負い、痛打によって前腕とあばら骨に痛打を与える。それなりのダメージを与え、瀕死には追い込んだものの殺しきれなかった。

バックニア「じゃあ、俺がそいつトドメを指すよ。」

バックニアの攻撃（「はっはっは！くたばれ〜」）によって棍棒を持ったオークを倒す。

バックニア「カーッカッカカカ<sup>4</sup>」

マスター「残りの2匹のオークは1匹倒されたのを見て、やる気になってる。」

フドーリン「俺もやる気になってやろう」

ファラシオン「やればできるんだお前たちは(笑)」

2匹のオーク対バックニア・フドーリンの白兵戦となる。第1ラウンド初手はバックニア

---

<sup>4</sup> 『キン肉マン』のアシユラマンの笑い声。内輪で『キン肉マン』が流行っていた為、バックニアのプレイヤーが披露。この時ほど脚注がありがたいと思った事もない。

---

---

バックニア「爪にくだわさ〜！<sup>5</sup>」

よくわからない語尾をつけたが、はずれ。続いてファラシオン

ファラシオン「遠くにいるボスオークに『眠り』の魔法を唱えるよ。」

ボスオークに対して『眠り』唱えるが失敗してしまった。失敗しただけでなく、敵に気づかれる事になる。

フドーリン「てことは、俺はハンマーを持ったオークに攻撃だな。」

この攻撃は13点とそこそこのダメージを与える。脇への痛打を与える。このハンマーオークはフドーリンに反撃をし、9点のダメージを与え、痛打も加わる。<sup>6</sup>

マスター「脇への一撃、1ラウンド行動力-40。」

フドーリン「やるな。オーク如きに思うけど(笑)」

爪のオークによるバックニアへの攻撃ははずした。

バックニア「こっちもイーブンだな。はずしはずしで。」

次のラウンドのイニシアチブだが、PC揃って低い目を出し、オークに先制を許してしまう。爪オークはバックニアに2点のダメージを与えるが・・・

マスター「ここで、石弓を持ったオークが攻撃するよ。ここでボロミアみたいに誰か死んでくれると盛り上がるんだが・・・」

バックニア「誰に攻撃するんだ？」

マスター「・・・まあ、論理的に考えるとファラシオンだな(笑)」

バックニア「魔法かけようとしたからねえ。」

しかし、このウル・・・もといボスオークの攻撃ははずしてしまう。

ファラシオン「はっはっは、この灰色港のファラシオンへの攻撃など・・・あと百年生きてからにせい！」

続いてハンマーオークの攻撃もフドーリンにははずしてしまう。フドーリンとハンマーのオークはお互いの傷で戦果を挙げられていない。続いてバックニアだが、しくじり寸前の目で外してしまう。

次のラウンド。イニシアチブは再びオークの集団からになるが、ファラシオンの方が早かった。

ファラシオン「ホブオーク（ボスのオークのこと）に『光弾』を撃つよ」

無限ロールが発生し、199という高い目を出す。しかし、光弾の魔法は攻撃力の上限が決まっているため、一撃でボスのオークを倒すまでには至らない。痛打は・・・

マスター「中程度の帯電、打撃+6、金属製の鎧を着ているので2ラウンド麻痺」

ファラシオン「やった！ラムちゃんと呼んでくれ<sup>7</sup>。呼ばれたら困るけどね。(笑)」

マスター「ただ、そんな事して喜んでいる間に周りからオークが集まってきているんだけど」

バックニア「なにいい？」

マスター「少なくとも、新たに2匹のオークが向かってきている。」

---

<sup>5</sup> 何その「くだわさ」って・・・？

<sup>6</sup> 後から思ったら、このオーク行動力-40だからあたるわけなかった。

<sup>7</sup> え？解説するの？しなくてもわかるでしょ。

---

フドーリン「あのボスオークを何とかすれば何とかかなりそうな気もするんだけど。」  
バックニア「だな。こいつらやっつけたらボスオークをやっつけるか。」

しかし、次は爪オークの攻撃だった・・・

マスター「ゴメン。無限ロール・・・」

20点の大ダメージをバックニアに与え、痛打は・・・

バックニア「スゴックかこいつは。やばい俺ジムだ。<sup>8)</sup>

マスター「死んじゃうかな。爪で(笑)。太ももの片方に切りつける。毎ラウンド打撃2(出血)<sup>9)</sup>

その後、フドーリンが一撃でハンマーオークを倒す。こちらも40点のダメージを与え、打撃だけで充分倒したのだが・・・

フドーリン「痛打足していい？どんな死に様なのか」

マスター「どうぞ・・・『腹部が重傷。』ボディにダメージ与えてふっ飛ばしたとかにしますか」

バックニアもその後、爪オークに攻撃をし、麻痺させる。

次のラウンドだが

フドーリン「周りの状況はどうなの？」

マスター「オーク2匹が集まってきている。あ、知覚ロールをしてくれ」

ファラシオンだけ気がついた。

マスター「(ファラシオンにだけ聞こえるように)宿屋からオークが1匹出てきて、前に出たバックニア、フドーリンを後から攻撃しようとしている」

ファラシオン「黙ってよっかな(笑)オークだあ！そこにもいるぞお！」

バックニア「なにいいい！？」

マスター「ダガーを持っているオークが現れた。」

バックニア「獲物がバラバラなんだな。」

マスター「バラエティを持たせたかったの。」

フドーリン「巨大オーク(ボスオーク)まで何メートル？」

マスター「20m位かな。」

フドーリン「攻撃できる？」

マスター「できるけど。攻撃にマイナスがつくよ」

フドーリン「いっちゃおうかな」

マスター「分かっていると思うけど、2匹遠くに来て1匹は弓を持っている。かつ後にもダガーを持ったオークがいるんだけど。」

バックニア「弓オークは俺が引き受けるからお前はあのデカブツをやっちゃってくれ。」



<sup>8)</sup> ガンダムのこのシーンね。

<sup>9)</sup> この痛打のシステム。場合によっては(痛みによって)麻痺したり、(出血によって)行動の度に傷を負ったりするようになる。今更の解説だが

マスター「君は爪オークを残しているんだけど。後近くにダガーオークも来ているんだけど。いいのか？この多勢に無勢の状況？(笑) (図 2 オークとの戦い)」

フドーリン「やれるところまでやってみる。」

バックニア「今こそあの勇ましい音楽で仲間を呼んでくれ！」

ファラシオン「オークがやってきた(笑)」

フドーリン「こんな時、ジョンドレドとポンブリオンがいれば！」

イニシアチブを行う。ファラシオンは呪文の準備に入り、バックニアが行動する。

バックニア「じゃあ、俺はこの爪オークにトドメを刺した上で遠くのオークに向かうよ。」

マスター「刺せるもんなら刺してみ」

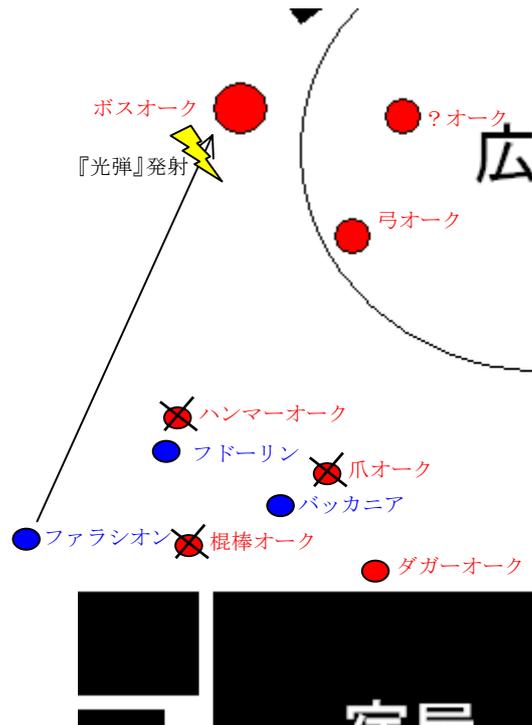


図 2 オークとの戦い

このバックニアの爪オークへの攻撃は無限ロールをし、トドメを刺すことに成功した。痛打も・・・

マスター「手を斬りおとす！」

バックニア「これでもう爪は使えないな。」

一方で不意打ちを仕掛けてきたダガーオークへフドーリンが攻撃する。

マスター「片脚への一撃で骨を折る・・・累積で3ラウンド麻痺。瀕死。残り1点。まあ、次のラウンドで気絶するけど。ファラシオンは？」

ファラシオン「ボスオークへ『光弾』を撃つ」

この攻撃。そこそこのダメージを与え、帯電させボスオークの麻痺を累積する。

マスター「金属製の鎧って弱いなあ」

フドーリン「あの鎧は俺が頂く！」

次のラウンドになる。帯電して麻痺中のボスオークに残りは遠くの2匹(弓、ハンマー)。

---

マスター「遠くのハンマーオークがフドーリンに走ってきて攻撃するよ・・・外しちゃった。」  
バッカニア「早いな。」

続いてプレイヤー達のターン。

バッカニア「ボスオークに走って行って攻撃するよ。」

19点のダメージを与え、痛打は。

マスター「君は相手の肩の骨を砕いた。石弓は使えなくなった。」

フドーリン「じゃあ俺は向かってきたハンマーオークにカウンターで攻撃するよ」

大ダメージを与えたが、痛打は目が走らず大した傷を与えなかった。ファラシオンは弓に持ち替えて終了

次のラウンド。ボスオークは動けるようになった。

マスター「更に、入り口近辺にいたオークがこっちに気がついた」

フドーリン「来る敵来る敵みんなぶつぶしてやる！」

マスター「いいのか、そんなんで・・・(笑)」

敵の一連の行動。ボスオークは武器を持ち替えて終了。続いてハンマーオークがフドーリンに攻撃する。鎧を着ていなかったの外した。

マスター「さすが裸！」

弓オークはつがえて終了。更に2匹増える事も忘れてはならない。ちなみに組み合わせはハンマーと弓だった。またしても。バッカニアはボスオークに攻撃するが痛打無しの軽傷。ファラシオンは弓オークに弓を撃ち、無限ロールになる。

マスター「ふりきれた！貫き痛打は・・・いくつ？」

ファラシオン「80。」

マスター「眼に貫通して即死(笑)やりやがった・・・」

ファラシオン「弓とはこういう風に使うものだ。」

マスター「次フドーリンは？」

フドーリン「あ、ファンブル。」

マスター「ファンブルだとお！？・・・足が滑って斧を壊してしまった(笑)」

フドーリン「もう使えません」

ファラシオン「フドーリン、爪だせ、爪(笑)」

フドーリン「しょうがねえなあ」

次のラウンド。武器を壊したフドーリンへハンマーによる攻撃。9点のダメージを与えるが痛打は・・・

マスター「あ、『振りが甘い・・・追加打撃なし』」

フドーリン「振りがあまーーーーーい！」

更に遠くにいた2匹のハンマー、弓オークだがそれぞれ接近、つがえて終了した。

そして、最後にバッカニアがついにボスオークにトドメを刺す

マスター「お亡くなり。気絶。」

---

バッカニア「やっつけたぞおおおお！」

マスター「オークはフドーリンと戦闘中のオークを残して逃げて行ったよ。」

残ったオークはファラシオンの『眠り』によって寝てしまった。

フドーリン「よし。縛ろう。」

バッカニア「戦闘終了？」

マスター「いや・・・全部ではない・・・(勘定中) 倒したなあ(笑)。まだ5,6匹残っているよ」

ファラシオン「教会に向かっているってことか・・・じゃあ、俺がボスの首をダガーで掻っ切ってそれを掲げながら走っていくよ。ケケケケケケケ！(笑)」

フドーリン「とてもエルフには見えんな(笑)」

マスター「えっと、教会に向かうと4匹のオークがどうやら教会の扉をぶち破るとこだったらしい。」

フドーリン「武器を置いて逃げろ！特にそこにある両手斧を置いて逃げろ！！(笑)」

マスター「一匹だけが踏みとどまっているけど、残りのオークは算を乱して逃げて行ったよ。」

更に、残ったオークもロールにより逃げていった。

ファラシオン「ちなみに両手斧置いていった？」

マスター「いや。置いていってない。代わりにハンマーと棍棒ならいくらでも(笑)」

ところが、更に村の畑にいたオークを見つける。

ファラシオン「じゃあ、その浅ましいオークに弓で攻撃するよ。武器は両手斧？(笑)」

マスター「(ロールする) 両手斧だった(笑)」

両手斧の念が通じたのか、オークを一撃で仕留める

マスター「片腕を貫通し、動脈を切断。意識を失って倒れた。両手斧はフドーリンのものだ」

ファラシオン「フドーリン。みやげだ。」

フドーリン「ありがとおお！」

### 第3章 補給部隊推参

マスター「教会に立て籠もっていた村人がぞろぞろ出てきた。」

ファラシオン「オークの集団は我々は追い払った。もう安全だ！」

マスター「『本当ですか？』と村娘その他諸々ができてきた『また貴方が助けてくれたのですか、ありがとうございます。』」

ファラシオン「(バッカニアに大して) 君は誰だ？見たところこの辺りの人間ではないようだが」

バッカニア「俺の名はバッカニア。南から来た。一族、探している」

フドーリン「何故舌足らずになる？(笑)」

ファラシオン「ビオルンは普通に喋っているというのに」

ファラシオン「村人に聞くよ。オークは突然襲ってきたのか？」

マスター「『そうです。一体世の中に何が起きているのでしょうか。』」

フドーリン「うーん。不穏な」

バッカニア「君たちはこの村に来たことがあるのか」

ファラシオン「いかにも。この村で人を待っているところだ。村長に聞くよ。ここにロリエンの民はこなかったか」

マスター「『いや。まだです。』しまった。「まだ」って言っちゃった(笑)。」

ファラシオン「じゃあ、村人の歓待をありがたく受けて待つよ」

---

---

バックニア「俺も傷を負ったので待つよ。」

傷の手当てをして、ロリエンの民を待つことになる。

マスター「君たちが村人の歓待を受けていると、その晩旅人がやってきた。」

ファラシオン「馳夫かな？<sup>10</sup>」

マスター「その旅人はローブを脱いで『ファラシオン様ですか？』と声をかけてきた。」

ファラシオン「じゃあ俺もローブを脱いでー」

マスター「ローブ着てたのか？」

ファラシオン「でも、お前は多分「フードをはずした」と思うんだけど(笑)」

マスター「『ガラドリエル様の遣いで来ました。私はアリオンと言います。ガラドリエル様からの伝言を伝えに来ました。』」

ファラシオン「待っていたぞ。」

アリオン「黒い剣の場所が分かりました。アイゼンガルドがアマーギンの指揮の元、ここからカラズラスに近い緑玉砦に運ばれたそうです。」

バックニア「なんか面白そうな話だから聞き耳を立てているよ。」

アリオン「そこで、黒い剣を取り戻してください、とのガラドリエル様からの伝言です。」

ファラシオン「わかりました！」

アリオン「あと、ガラドリエル様からいくつか品物を預かってきました。」

狂喜乱舞するPC達

マスター「まずファラシオンには指輪。ガラドリエルの紋章が刻んであるのと、+5魔力増幅器<sup>11</sup>。」

ファラシオン「わーお！うれしいものが転がり込んできた。この指輪は！こんなすばらしいものを私に・・・(感激している)」

アリオン「まだあります。」

ファラシオン「なにいいいいい！？(笑)」

マスター「あとは、+5の銀の短剣。特殊能力もある。」

ここで、BGMに重々しい音楽が流れてしまう

マスター「それ違うよ！(笑)周囲3mの魔力を察知して、熱くなる。」

アリオン「それから、貴方がフドーリン様ですか？」

フドーリン「おう」

アリオン「これは、エルフの作った戦斧です。これを使ってください。」

マスター「これは+25の性能を持つ、名前は『カチ割りゴン太』」

フドーリン「名斧カチ割りゴン太か。」

アリオン「それからこの鎖帷子を」

マスター「これは、+10の防御ボーナスを持つ鎖帷子ね」

アリオン「あと、ジョンドレド様は？」

ファラシオン「ジョンドレドは・・・と言って沈黙している(笑)」

アリオン「この剣と鎖帷子はどうしましょう？」

ファラシオン「その時まで預かっておきます。」

バックニア「それは俺が欲しいな！面白そうな話だし、俺も連れて行ってくれよ」

ファラシオン「連れて行くのはやぶさかではないが・・・それは預けるといことにしておいてくれ。」

---

<sup>10</sup> 馳夫。フロドと出会った時のアラゴルンの偽名。ちなみに映画版では Strider になっていた。あとどっかで見たのが韋駄天って訳だけど、どれもこれもどうかと思う。馳夫は馳夫でしょ。

<sup>11</sup> 魔力とは、いわゆるMPの事。これによって魔法を使う

---

使ってもいいけど、君のものではないから。」  
バックニア「君たちののは？」  
ファラシオン「俺たちは正式にもらったんだ。」  
フドーリン「『フドーリン様』って言っただろ？」  
ファラシオン「これは本来ジョンドレドヘルフが与えたものだからジョンドレドしか使いこなせないんだけど。預かっててもいい。ってこと」  
バックニア「・・・まあいいか、いずれ俺の物になるわけだし(笑)」  
マスター「この剣は+15の性能を持つ剣ね。また、切れ味が鋭いので痛打のロールが+5になる。それから、ミスリルが一部に入った鎖帷子。+10の抵抗のボーナスがついている。」  
アリオン「それから、ボンブリオン様・・・(笑)」  
ファラシオン「ボンブリオンは・・・(笑)」  
アリオン「こちらの腕輪を・・・」  
マスター「この腕輪は2つでペアになっていて、身につけたもの同士的位置がわかります。それから相手がどれだけ傷を追っているか、色でわかる。ダメージによって赤くなる。」  
アリオン「それから、この杖(ワンド)を・・・」  
マスター「『雷弾』という魔法を5発まで撃つことができます。」  
ファラシオン「『雷弾』だって、強いじゃないか。」  
アリオン「あとは・・・(お約束ですが)・・・ブローチを(笑)」  
ファラシオン「パー着!(笑)」  
マスター「人数分。4つのブローチね。」  
バックニア「余るな。何か効果はあるの？」  
マスター「ない。」  
ファラシオン「そういえば、腕輪の名前は？」  
マスター「うーん、特に決めてなかったんだけど(効果から)『恋人(ラバース)の腕輪』とかでいい？」  
ファラシオン「やだー。『仲間達の腕輪』ーフェローズリストとかにしようよ」  
マスター「まあ特に決めていなかったので好きにしてください。」  
ファラシオン「アリオンはロリエンのエルフ？アリルについては何か知らないの？」  
アリオン「いや、特には」  
ファラシオン「何だ、アリアリ繋がりで何か知ってるかと思ったのに。」

補給物資を受け取ったところで、緑玉砦に向かって旅に出る。

## 第4章 これが野伏の戦い方だ

ファラシオン「清しい朝だ。ガラドリエル様の指輪も光り輝いている。鳥もさえずっているなあ」  
バックニア「そういえば馬ってもらっていいのか？俺の分はあるのか？」  
マスター「うーん。ないね。2頭しか」  
バックニア「誰か乗せてくれー」  
フドーリン「俺は一人だけで馬が大変だろうから。」  
ファラシオン「じゃあ、しょうがないから乗せてあげよう」

2日間、何事もなく過ぎるが、3日目・・・

マスター「えーと、小さな森に入るのだが、ファラシオン知覚ロールをしてくれ」

出目は大したことなかった。

マスター「ファラシオン。君たちが楽しく会話しているところでー」  
フドーリン「(笑)」

---

バックニア「(笑)」

ファラシオン「(笑)<sup>12</sup>」

マスター「ドス！22点のダメージ。矢が突き刺さった。」

ファラシオン「痛————ツ！もう、瀕死だよ」

マスター「いきなり、ファラシオンの肩の辺りに矢が刺さっている。」

ファラシオン「敵だ！敵だ！何の判定もなく！(笑)」

マスター「一応知覚ロールしたやん。」

バックニア「俺は馬が暴れないように抑えるよ」

ファラシオン「抑えなくてもいいから戦えよ。」

マスター「馬から落ちるとダメージを受けるよ」

ファラシオン「何！？そうか」

バックニアのロールは失敗

マスター「馬から落ちたよ。1点のダメージ」

ファラシオン「ドゥワ！」

フドーリン「俺は馬から降りて警戒するよ。」

バックニア「大丈夫かファラシオン！」

ファラシオン「大丈夫じゃない！！(笑)」

バックニア「俺も馬から降りて、辺りを警戒するよ」

マスター「知覚ロールをしてくれ」

ファラシオンが大成功をした。しかし、相手の「隠れ」のロールも高かった。

マスター「君たちは結局矢の飛んできた正確な方向は分からなかった。」

フドーリン「じゃあ俺はファラシオンを守ってやる。ただ、矢が飛んできたら避けるけどな(笑)」

マスター「次のラウンド、2本目がいくよ。」

ファラシオン「イニシアチブさせてよ。」

まあ、イニシアチブを取ったところで敵の姿が見えない以上、大して意味があるとも思えないが・・・

バックニア「木の陰に隠れるよ。」

ファラシオン「え！？木の陰に隠れちゃうの！？」

マスター「いいけど、2本目でファラシオン確実に死ぬぞ。多分」

バックニア「ファラシオン、隠れてくれよ」

ファラシオン「呪文発動して隠りたいんだよ。」

バックニア「なるほど。」

マスター「で、二人はどうするの？」

フドーリン「隠れようと思ってもこの状況じゃあな・・・」

そこで、もう一度知覚ロールをするが、これもダメ。

バックニア「うーん。わかんねえよ。どっから襲ってきているのか」

ファラシオン「・・・(しばらく呪文を確認)お！『楯』の呪文を使うよ」

バックニア「どういう呪文なの？」

ファラシオン「射出攻撃に対して-25。」

---

<sup>12</sup> まあ、見ての通り。

---

---

マスター「ファラシオンの『楯』の発動はOK。じゃあこっちの2発目行くよ。あーあ、矢に毒をぬっておきよかったよ」

ファラシオン「死んじゃうだろ！(笑)」

2発目はフドーリンへの射撃。側面からの攻撃。

マスター「今度はフドーリンに矢が刺さった。8点のダメージ。痛打は脇をかすめた。」

フドーリン「どっからきたあ！？」

更に知覚ロールを3人は行う。PCがわからなかったのでアリオンにロールさせた。

アリオン「あっちよ！（といてある方向を指す）」

ファラシオン「じゃあ俺はそっちに向かって正面を向くよ(笑)<sup>18</sup>」

敵の方向もわかったところで次のラウンド。バックニア、アリオン、フドーリンはアリオンの指した方向へ走る。ファラシオンは呪文の準備を行う。

マスター「ところが、そっちの方向へ向かうとヒュイッって音がして、猟犬が2匹現れてバックニアとアリオンに向かって襲い掛かってくる」

フドーリン「今日は犬鍋か」

マスター「とりあえず不意打ち判定で攻撃します。」

フドーリン「用意周到だな」

マスター「だって、俺いろいろ考えたもの。」

バックニアは犬に引っかけられて9点のダメージと痛打によって胸に軽傷を負い、出血と麻痺を受ける。

マスター「アリオンも同様に猟犬によって足止めをくらっている。」

フドーリン「じゃあ、俺はその（バックニアと戦っている）犬に攻撃するよ。」

バックニア「カチ割り丸？」

フドーリン「カチ割ってやる~~~~~！」

この攻撃により、猟犬を吹っ飛ばした。痛打によってほぼ瀕死となる。

フドーリン「まず一つ！」

次のラウンドになる。イニシアチブの結果、バックニアは猟犬に対して攻撃を行い。これも同様に痛打によって一撃で仕留めたことになる。

バックニア「二つ！」

フドーリン「犬なべ〜。大丈夫だ。臭みを取ってやるよ(笑)」

ファラシオン「俺、自分に『透明』をかけた。」

マスター「なるほど。OK」

謎の敵による矢の攻撃。バックニアに撃たれた矢は6点のダメージ。

マスター「続いてアリオンの攻撃。矢が放たれた方向にチャクラムを投げた。」

バックニア「チャクラムとは。渋いな。」

マスター「聞かれなかったから言わなかったんだけどね。」

しかし、この攻撃はかすり傷にしかなっていない。

---

<sup>18</sup> 『楯』の効果は正面のみ。

---

マスター「闇雲に撃ったチャクラムはたまたまカスただけだ。」

次のラウンドの知覚ロールもまだ失敗。相手は見えない。そこでイニシアチブ。

ファラシオン「175！」

マスター「お、すごいな。何をする？」

ファラシオン「じゃあ 175 のスピードで服を脱ぐ(笑)」

アリオンとバッカニアは木に隠れながら接近し続けるが、バッカニアへの攻撃によって 10 点のダメージと、更に麻痺と出血が累積する。

マスター「フドーリンはどうする？」

フドーリン「・・・じゃあさ、このターン潰して、凝視したら（知覚ロールに）ボーナスくれる？」

マスター「OK。」

フドーリン「じゃあ必死こいて探す。」

マスター「そして、更に敵の攻撃だが、また犬笛を吹いて犬が 2 匹現れた。」

ファラシオン「とめどないなあ」

そして、遂にフドーリンがラウンドを潰したおかげでわかった。

マスター「フドーリンの眼にはバラールが犬笛を吹いた直後に見える」

フドーリン「バラールーーーーーーーーールッ！」

バッカニア「バラールだと！？」

ファラシオン「お前知らないだろ(笑)」

バラール「チッ、気づかれたか！」

フドーリン「眼が見えない癖に矢なんか撃ちやがって！(笑)」

次ラウンドのイニシアチブだが、バッカニアが最速で行動する。

バッカニア「隠れるよ。」

バッカニア（ファラシオン）は犬及びバラールの矢によって痛打を負い、出血があるためあまり激しく動けないようだ。

マスター「犬が目の前にいるんだがなあ・・・」

アリオン「フドーリンさん、敵を追ってください。犬は私が引き付けます！」

マスター「バラールは逃げていく。」

フドーリン「追うよ」

マスター「ファラシオンはどうする？フドーリンが「バラール！」と叫んで、アリオンが犬 3 匹と戦闘中。」

ファラシオン「じゃあ、『眠り』の準備をするよ。」

フドーリンだけバラールを追い、残りのメンバーは犬 3 匹を相手にする。面倒なのでハンヨるが犬 3 匹は最後ファラシオンの『眠り』もあり、問題なく全滅させた。

マスター「さて、フドーリン。君はバラールを追いかけている。叫んで。」

フドーリン「バラールーーーーーールっ！(笑)」

マスター「バラールを追っていくと、森の中の広場に到着した。バラールはそこで止まり剣を抜くと」

バラール「ケリをつけよう」

フドーリン「ここで会ったが 100 年目。ケリをつけてやる」

---

というわけで、バラールとフドーリンの一騎討ちが始まった。まずはフドーリンの先制攻撃

フドーリン「一撃で屠ってやる！死ねえええ！」

フドーリンの攻撃は40点の大ダメージを与え、おまけに痛打も与えた。

マスター「君の一撃でバラールは吹っ飛んだ。」

フドーリン「弱い奴だな。この斧（カチ割り丸）は強すぎる」

マスター「まだまだ。君が追いかけると」

バラール「この私の力を忘れたか」

マスター「という言葉と共にバラールの眼が開いた」

念の為抵抗を行うが、これは失敗・・・

マスター「すると、君の胸が苦しくなった。すごい苦しくなった」

フドーリン「ぐっはあ！！バラールう・・・ガクッ」

・・・

マスター「しかし、再び君が目覚めるとバラールは見えなくなっている。おびただしい出血の後はあるのだが。気になるのは君の周りの木がめっちゃめちゃに切り倒されている」

フドーリン「！」

マスター「まるで、大きな獣にでもなぎ倒されたみたいだ。」

フドーリン「無意識の内に斧でも振ったか・・・？バラールをもう少しで倒せるとこだったのに。ところで何だこの騒ぎは・・・？」

とりあえず合流した他のメンバーと共に調べてみる。

マスター「ファラシオンがわかるよ。どうやら大きな獣の爪の跡のようだ。5mはある」

ファラシオン「こんなに大きな獣とは一体・・・」

フドーリン「よく俺食われずにすんだなあ。」

ファラシオン「何かの魔物か。さっぱりわからん」

バックニア「ともかく、この状況では何とか砦に言っても返り討ちにあってしまうなあ。体勢を立て直さないと。」

ファラシオン「俺レンバス持っているよ。パク！」

マスター「・・・回復するかあ！？(笑)」

ファラシオン「これって仙豆じゃないの？(笑)」

フドーリン「とりあえずここは一休みしようではないか。」

バックニア「そうしよう」

## 第5章 強引な回復と強引な親友

パーティはその場で一晩休み、体力を回復させる。

マスター「翌日からまた旅を続けるが、あと三日の行程が残っている。」

バックニア「まだ行程の半分くらいか。この先には人がいそうな場所はないの？」

マスター「この先はカラズラスに入るから、ないねえ。」

バックニア「困ったなあ。こんなひどい状況では。」

---

フドーリン「ちゃんとした手当てをすれば回復できるの？」

マスター「そりゃ、そうだけど・・・」

バックニア「日程を遅らせてでも、全快させたいなあ。」

マスター「薬草を探す事はできるよ」

フドーリン「野伏らしいことをしてみよう」

しかし、＜薬草探し＞というスキルが必要であった。

バックニア「オオバコくらいしか見つからない。」

フドーリン「これは！・・・ヨモギだ。ヨモギは体にいいんだぞ。」

中々先に進まないの、仕方ないからアリオンが打撃を回復させる薬草を見つけた事にす  
る。

マスター「適当に探してもアレなので、アリオンが『こういう薬草を見つけてくれ』とでも言った事に  
しよう」

実際、かなり温情処置であるがファラシオンが薬草を見つけた。「ミレンナ」という一本  
で打撃が10も回復する薬草を5本見つけた。

バックニア「すごいな！」

ファラシオン「うわーお！なんじゃこりゃ！群生地だーっ！(笑)アリオン、これは「ミレンナ」という  
薬草ではないのか？」

アリオン「そうよ。これを煎じて飲むと打撃が10回復するわ(笑)」

この薬草を3つ使い、バックニア、フドーリン、ファラシオンの打撃を回復させた。更に  
もう一晩休むことにより、何とか安全圏まで全員回復したのであった。

ファラシオン「ここまで回復すれば何とか。先へ進もう」

マスター「じゃあ、先に進むね。ここからカラズラス山地に入るよ」

バックニア「ここで馬とおさらばか。」

マスター「そうです。」

フドーリン「しょうがねえなあ。」

マスター「かなり険しい道なので、各自＜登坂＞でロールをしてくれ」

各自、＜登坂＞技能でロールをし、慣れていないファラシオン、バックニアがダメージを  
負う。フドーリンは無限ロールで大成功を収める。

フドーリン「壁に垂直に立っている感じだね。何やってるんだ二人は」

ファラシオン「お前が異常すぎるんだよ！(笑)」

更に一日の途上で緑玉砦に到着した。

マスター「そうすると、何とか緑玉砦が見えてくるのだが・・・(図 3 緑玉砦)」

ファラシオン「あれじゃないのか？」

## 緑玉砦1F(外観)

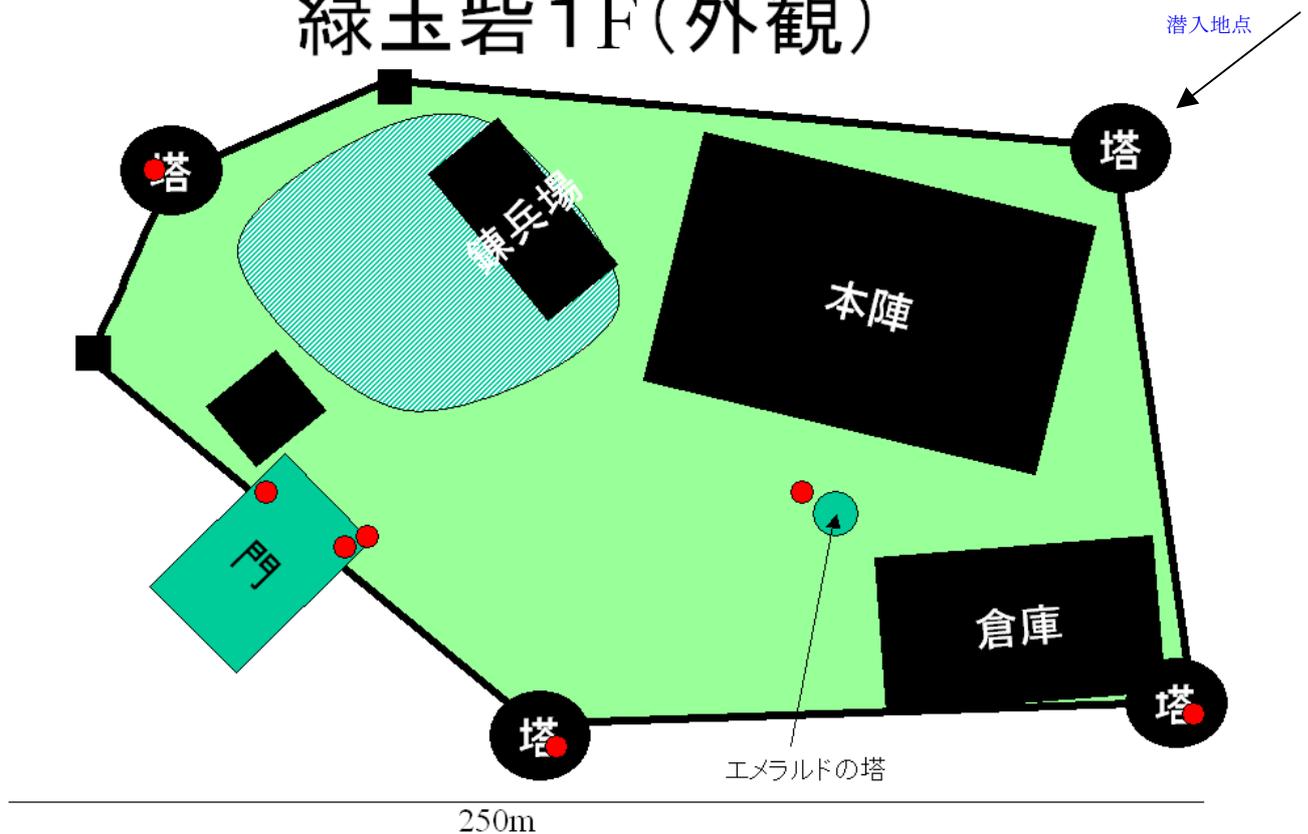


図 3 緑玉砦

マスター「問題は、これがこの緑玉砦の由来となったエメラルドの塔。半径 1.5m くらい、高さ 10m くらいの塔である」

アリオン「アマーギンはここに黒い剣をここに運び入れて調べている。警備の兵もいるでしょう。」

ファラシオン「バラールもここにいるだろうな。」

バックニア「俺たちがここに向かっていてのはわかっているだろうからなあ。」

ファラシオン「黒い剣はどこにあるかだな・・・」

バックニア「倉庫じゃん。」

ファラシオン「・・・本陣じゃん(笑)」

フドーリン「エメラルドの塔ってのはどういう感じ？オベリスク？」

マスター「高さ 10m、直径 1m。で、頂上部分には巨大なエメラルドが置かれている。」

バックニア「人は入れないじゃん」

ファラシオン「緑玉砦のついでに歴史を思い出す！」

とりあえず若干無茶があるがロールをした。バックニアが何と無限ロールに成功する。

マスター「えーっと・・・バックニアが・・・」

ファラシオン「蛮人のくせに・・・南から来たくせに」

バックニア「俺、知ってるよ。これねー」

ファラシオン「何だよ！言ってみろ。」

マスター「古い伝承にー」

バックニア「古い伝承に出てきたんだよ。」

---

マスター「元々はドワーフが建てた物らしい。昔は多くの魔法使いが訪れてエメラルドに魔力を注ぎ込んだらしい。」

ファラシオン「染み込んだのか・・・」

バックニア「目的のブツがどこにあるか、探さなきゃなあ・・・やっぱ本陣かな。どうやって潜入するかも問題だし」

フドーリン「見張りは？」

マスター「もう少し寄らないと・・・」

パーティはもう少し接近した。

マスター「それぞれの塔の上に一人ずつ。それから塀なんだけど高さ 15m程だがそれほど整備されているわけでもないの、上る事もできそう。ついでにエメラルドの塔の下にも見張りが一人。」

ファラシオン「一際入りやすそうな壁はどこらへん？」

マスター「決めてない」

ファラシオン「決めてくれ(笑)」

バックニア「じゃあ、本陣の裏手ね。本陣の裏から入ろうか。」

マスター「ファラシオンがリーダーになって決めてくれ。」

バックニア「本陣の塔の上の見張りを眠らせることはできるの？」

マスター「できるよ」

ファラシオン「それパワーポイント？だったら見張りの位置書いて。」

書いた。

バックニア「門のところに3人、塔の上に一人か。」

ファラシオン「今何時？」

マスター「昼くらいだね」

ファラシオン「潜入するのは夜にしようか。」

バックニア「向こうさんもそれなりの考えがあるだろうが、潜入しやすいのは夜だな。」

ファラシオン「夜になったらどうせあいつら火をたたくだろうから」

フドーリン「夜まで寝るか」

というわけで夜まで寝る事にして、夜になる。

ファラシオン「今回は『友愛』<sup>14</sup>の呪文を使ってみようかと思うんだよね。」

フドーリン「なるほど。」

マスター「『友愛』の射程がそんなに広いわけじゃないとおもうぜ。30m。『友愛』をかける前に発見されそうな可能性もあるけど」

ファラシオン「じゃあ、ギリギリまで近づいて一塔から何m？」

フドーリン「まあ、見つからないだろうという程度。」

ファラシオン「知覚ロールが必要じゃない程度(笑)」

マスター「岩場だしなあ。知覚ロールが必要でない範囲なら60mってとこかな。」

ファラシオン「じゃあ、塔から30mこっちに『響音』<sup>15</sup>をかけるよ。で、猫が一分おきにニャアというー(笑)」

マスター「冷静にツッコませてもらうが・・・猫如きで振りむかねえよ！見張りは！(笑)」

ファラシオン「ふりむくよなあ。」

---

<sup>14</sup> いわゆる「チャーム」の呪文。対象を魅了して術者の親友だと思込ませる。効果時間はレベル\*1時間。今回はファラシオンのレベルは3なので3時間となる。

<sup>15</sup> 指定した場所から音を発生させる呪文

---

フドーリン『メタルギア・ソリッド』<sup>16</sup>をやったことないな。コンコンってやるごとに振り向くんだぞ」  
ファラシオン「で、俺は反対方向に進みながら、見張りが「うん？」とか言って振り向いた時に前進する」

小細工のおかげでうまくファラシオンはうまく隠れながら『友愛』の射程まで前進できる。

フドーリン「じゃあ、俺も隠れながら進むよ」

ファラシオン「お前は来なくていいよ」

マスター「いや、今「行く」って言ってダイスを振った以上は・・・」

フドーリン「やめろよ余計な事すんの！何のために魔法使ったんだよ！（笑）」

幸い、フドーリンも発見されず、ファラシオンは見張りに大して無事に『友愛』を唱え、成功した。

マスター「うーん。成功したのでファラシオンが親友になった気はするんだけど。隠れていて見えないんだよね。姿を現すの？」

ファラシオン「そうだね。」

マスター「「お、ファラー」」

ファラシオン「シーーッ！とりあえずそちらに行くから。と言ってロープを投げるよ。」

ファラシオンは見張りにロープを持ってもらい、無事に登る事ができた。

マスター「『やあファラシオン、どうしたんだよ。こんなトコで。久しぶりだな。元気にしていたか？』」

ファラシオン「おう。お前も元気だったか？」

マスター「『おう。いつもこんな感じだよ』」

ファラシオン「実は、今日友達を連れてきたんだが、一晩泊めてくれないか。」

マスター「『うーん、俺も今勤務中だから勘弁して欲しいんだがなあ』」

ファラシオン「そうだよな。実は今回は報告に来たんだが・・・怪しい奴を見たんだが。」

マスター「『下っ端の俺にはよくわからないんだが、このエメラルドの砦に偉い魔法使いが来て、何かをしているらしいから、それを狙ってきたのではないか？』」

ファラシオン「ふーん、多分そいつではないかと思うんだけど、見たぞ」

マスター「『ふむ。じゃあ、着いてきてくれないか？』」

ファラシオン「わかった。もちろん、階段下りる前に『眠り』かけるから。不意打ちだからね。（笑）」

寝た。

マスター「階段下りる所に『眠り』をかけたんだよな。転げ落ちていった。」

ファラシオン「じゃあ、見張りの名前は？」

マスター「・・・ベック」

ファラシオン「じゃあ、ベックを縛るよ。」

マスター「ひどいな。何のための『友愛』だよ」

ファラシオン「『友愛』満点じゃないか。（笑）」

そして、他のメンバーも見張り塔を登り、合流した。

マスター「というわけで君たちは本陣の裏手の塔の上にいる。」

バッカニア「どこに例のブツ<sup>17</sup>があるか聞き出したのか？」

ファラシオン「これから聞き出すところだ。」

---

<sup>16</sup> コナミ。ダンボール箱に隠れながら潜入する話。あれ？ちょっと違った？

<sup>17</sup> ふと思ったんだけど何故に『例のブツ』？別に犯罪的要素は欠片もないはずなんだが。

---

マスター「まだ、『友愛』切れていないんだよな・・・」

ファラシオン「まだ切れていないねえ・・・じゃあ尋問しようか。じゃあ君たちは隠れていて」

バックニア「はあい」

ファラシオン「いや、でもこいつが叫びそうになったら殺していいからね。じゃあ起こす。起きろベック！」

ベック「おお・・・」

ファラシオン「大丈夫か、ベック」

ベック「うう・・・一体何が・・・」

ファラシオン「いや、突然俺たち襲われたんだよ(笑)」

ベック「何！？それは一体・・・」

ファラシオン「俺も後ろから襲われてこのザマだ！」

ベック「いや、傷も何も・・・」

ファラシオン「見えんのかこの傷が！(笑)」

ベック「いや、何もー」

ファラシオン「大丈夫かお前は、どこか痛くないのか？」

ベック「どうやら足が痛い、階段から落ちたような感じがする」

ファラシオン「あいつらは黒い剣がどうか言っていた、あいつらはどこにいったと思う？」

ベック「黒い剣・・・かどうかはわからないが何か貴重な物が本陣に運び込まれたらしい。それよりこれを早くこれをほどこいてくれよ(笑)」

ファラシオン「本陣だな！分かったぜ(笑)」

ベック「だからこれをほどこいてくれよ！」

ファラシオン「よし、ちょっと後回るぞ、と言って『眠り』をかける」

しかし、悪い事はできないもので、失敗してしまう。

ベック「ファラシオン何をする！まさか俺に魔法をかけるつもりか！おおおおおー」

ファラシオン「すかさず口を塞ぐー」

フドーリン「俺はベックの口元に斧をつきつけるよ。」

間に合うかどうかロールを行うが、結果はファンブルとなってしまう。

ファラシオン「お前はいい！お前はいい！」

マスター「つきつけるつもりだったんだよねえ・・・ファラシオンの腕を切りつけるか、見張りの首を刎ねてしまうかしょうか。」

結果、ベックの首を刎ねてしまった。

フドーリン「あっ！」

ファラシオン「俺は呆然とした顔でフドーリンを見つめるよ。」

マスター「しかも、派手に物音を立ててしまった。本陣の方にも聞こえてしまった。『おい、何か聞こえなかったか？』」

バックニア「にゃあ～」

マスター「『いや、絶対何か聞こえたって』という声と共に、本陣の裏手の勝手口から一人出てきた。」

ファラシオン「じゃあ『眠り』」

バックニア「『友愛』は？」

ファラシオン「『友愛』だとさ、「ベックは大丈夫だ」って「何でお前はここにいるんだ？」って(笑)」

バックニア「眠らせるしかないな。」

フドーリン「じゃあ俺も隠れていよう。」

---

本陣から出てきた一人が塔に近づいたところでファラシオンが『眠り』の魔法を唱えて眠らせようとする。成功した。

マスター「かかったね」

ファラシオン「じゃあ、すかさず中に連れ込む」

フドーリン「もう猿ぐつわもかませておいて、声も出させないようにする」

ファラシオン「で、床下に放り込むよ」

マスター「床下？あったんだ(笑)」

ファラシオン「じゃあ、階段下の倉庫に放り込むよ。」

マスター「わかった。あったことにしよう。つつこんだよ」

ファラシオン「これで朝まで大丈夫だ」

マスター「いや、そろそろ交替の兵士が来るはずなもの」

ファラシオン「何い!？」

マスター「あくまでも可能性だよ。と、アリオンが言ったことにしよう。」

バックニア「とりあえずベックも放り込んでおいて、塔の下は空にしておこう。もうこっちは勝手口の場所はわかっているから。」

ファラシオン「じゃあ入るか。勝手口の近くに誰がいる？」

マスター「外にはいない。じゃあ、勝手口の近くにいくわけだね。」

## 第6章 騒々しい潜入者

ファラシオン「中に誰がいるのだろうか・・・？」

フドーリン「一人はいるんじゃないのか？」

バックニア「ここ、1階にも2階にも窓があるんでしょ？」

マスター「あるよ。」

バックニア「そこから中に人がいるような事は確認できない？」

マスター「窓から覗くってことだね。」

フドーリン「明かりが洩れているかって事だよ。」

バックニア「とりあえず、勝手口の窓だけ。」

マスター「窓から明かりは洩れていないよ。他の窓は以下の通り（図 4 緑玉砦本陣内）」

バックニア「なるほど、どうしたもんかね。2階は？」

バックニア「てことは、こっちの勝手口にはいないってことか。」

マスター「念の為、知覚ロールしてくれ。」

アリオンが成功した。

マスター「ここ（勝手口）なんだが、小さい明かりがついているよ。」

バックニア「あそこ、暗いけど明かりが小さく洩れているよな」

ファラシオン「そうか？」

フドーリン「なんだかわからんのう？」

ファラシオン「豆電球つけて寝ているんじゃないのか？暗いと寝れない人なんだよ(笑)」

フドーリン「豆球の部屋の窓は、外から中は見れる？」

マスター「見えるけど・・・」

バックニア「その為には近づかなきゃな。」

ファラシオン「それは、アリオンに頼もうぜ。」

マスター「あ、ああ。」

ファラシオン「忍びだから」

マスター「ああ。NPCだからかと思った。これで見つかったら怒るだろうなあ・・・」  
 ファラシオン「その時は暴れるだけだから。」  
 フドーリン「バラァァル！って叫びながらね(笑)」

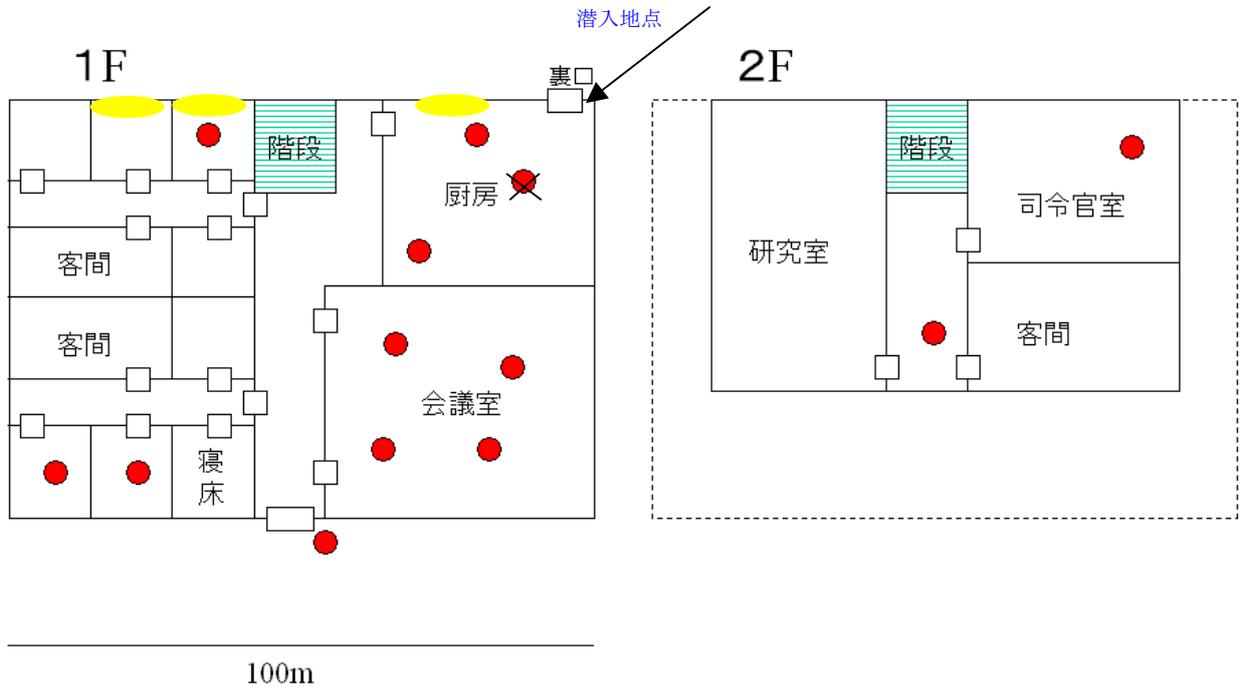


図 4 緑玉砦本陣内

アリオンの調査・・・ロールは成功した。

アリオン「どうやら、キッチンのようなね。この薄い明かりなのだけど、どうやらつまみ食いをしている馬鹿が一人いるようね(笑)」

バックニア「そんな事までわかったのか。」

ファラシオン「入ると、こいつと目が合うって寸法だったんだな。」

フドーリン「ガチャッって開けて、目が合ったらシーッってやったら何とかかなりそうだな(笑)」

ファラシオン「こんな狭い砦だったら互い顔見知りなんだろうなあ・・・」

バックニア「ただのデブか・・・」

ファラシオン「何かあるとしたら2階なんだろうな。」

バックニア「地下があるかもしれないぞ。」

フドーリン「あるとすれば地下じゃないのか？」

バックニア「どっちにしろ、本陣の中入って調べない事にはな。」

ファラシオン「・・・俺の銀の短剣は反応していない？」

マスター「3m以内か・・・反応はしていないよ」

バックニア「他の窓もどういう部屋か確認してみようぜ。明かりのついた部屋に人がいるとか。」

ファラシオン「そりゃいるだろ。」

バックニア「いや、消し忘れていたかもしれないぜ」

ファラシオン「この時代電気ないんだからそれはないって(笑)」

という事で、他の部屋も調べることにする。調べるのはアリオンだが

アリオン「他の2つは、それぞれ別の部屋で兵士がいるようだね。」

---

相談する事、約 10 分。面倒なのでハシヨって次行きます。

ファラシオン「じゃあ、お前たち捕まえた二人の服を着てー」

フドーリン「俺は着れないけど。」

ファラシオン「別に服装って統一されているわけじゃないでしょ？」

マスター「いや、服装というかアイゼンガルドの紋章は付けているけど」

ファラシオン「じゃあお前ら、鎧だけ着用しろ。それでその（キッチン）扉開けて、『何をしている！ 貴様』って一脅かしつつ、不意打ちで殺す(笑)」

フドーリン「一撃で殺すってのは中々難しいが、口に物運んでいるから大丈夫でしょう。(笑)」

バックニア「まあ、変装するのはいいアイディアだね。うろちょろしていると見つかったときにアレだしね。」

マスター「じゃあ、とりあえず変装するんだね。今のミスリルの鎖帷子は脱ぐの？」

バックニア「その上に着れないの？」

マスター「着ているのが軟らかい皮鎧だから無理だね。」

というわけで、変装は断念する事に。

フドーリン「じゃあさ、お前が矢をつがえておいてー」

ファラシオン「そうか。お前が脅している間に俺が撃てばいいのか。エルフは夜目が利くしな。」

マスター「えーっつと・・・」

ファラシオン「何だ、エルフの夜目を調べているのか？だって、レゴラスあんなに夜撃ちまくってたじゃん。」

マスター「『エルフ程夜目の利く種族はいない』(笑)もう昼間位見えてくれ」

ファラシオン「じゃあフドーリンがアイゼンガルドの鎧着て、脅している間に俺が撃つから。」

マスター「OK。ただ一つ。フドーリンが鎧を着れない。」

バックニア「俺が着るしかないな。15歳の少年だから合うだろう。」

ファラシオン「待って、15歳の少年に威圧は無理だ(笑)じゃあもう鎧着ないでフドーリンが脅せ」

フドーリン「そうだな。」

ファラシオン「『何をしている！』って言われたら、こうなるはず。「あ、ああああ・」これクリリンの真似ね。18(笑)」

マスター「あー、わかったわかった。かなりわかった」

バックニア「よし、作戦開始だ。」

フドーリン「じゃあ、3，2，1で突っ込んで俺が脅しをかけるから、ドン！って」

マスター「じゃあ、勝手口を開けて・・・？」

フドーリン「勝手口を開けて、『何をしている！？』と小声で(笑)」

ファラシオン「俺がやりてえよ(笑)」



18 ちょっと違うけど、こんなの。ちなみにこの素材は30分頑張って見付かったもの。これだけ。

---

と言う事でいろいろあった結果突撃をした。まずフドーリンの脅しの効果を確認するためにロールをするが・・・

フドーリン「19(笑)。多分「お、お前、何してる？」ってドモった(笑)」  
ファラシオン「ダメだ！あいつには無理だった！もう狙いをつけなくて撃つ！」

ファラシオンの不意打ちの弓は、致命傷には至らないまでもダメージを与える事には成功した。すかさずフドーリンが抑えつけた。

マスター「抑えつけたよ。」

ファラシオン「さ、熱血漢出番だぞ。」

バッカニア「おう。」

ファラシオン「殺しとけ。俺は見えない事にするから。」

バッカニア「え？いいのか殺しちゃって。」

ファラシオン「じゃあ、縛って猿轡をかましておこう」

フドーリン「食料庫にでも放り込んでおこう。」

マスター「とりあえず、今の状況は何をするにしても静かにできたかを確認するためにロールをするよ」

更に猿轡をかますためにアリオンがロールを行う。

マスター「また投げたよ・・・(笑)」

ファラシオン「当たり前じゃないかそんなの(笑)」

アリオンのロールは問題なく成功し、静かに猿轡をかます事ができた。

マスター「縛った兵士を食料庫に放り込んだよ。で、今君たちは厨房と呼ばれるところにいるんだけど・・・」

バッカニア「そしたら、ドアの外がどうなっているか、調べておきたいなあ。」

ファラシオン「わかった。マスター、『呪文溜め』<sup>19</sup>の呪文で『眠り』を貯めておくよ。」

で、マスターが部屋の見取り図を出す。

ファラシオン「アリオンが聞き耳をしまーす・・・」

マスター「・・・」

ファラシオン「その為に出したんじゃねえのかよ？潜入ミッションだからわざわざ忍びを出したんだろ？じゃあ俺がアリオン使う？(笑)」

アリオンが厨房の出口の扉に聞き耳を行う。

マスター「扉の外からは何も聞こえない。」

バッカニア「なるほど、廊下になってるのかな」

フドーリン「廊下だろうね。」

ファラシオン「とりあえずドアを開けよう。」

マスター「開けて、外は廊下だね(マップを書き足す 図 4 緑玉砦本陣内参照) 階段があり、その下にトイレがある」

フドーリン「廊下の先は？」

マスター「見に行くの？」

ファラシオン「アリオンが見に行く(笑)そんな顔するなら俺『透明』使おうか？(笑)俺がやろうか？(笑)」

マスター「玄関です。玄関。」

---

<sup>19</sup> 指定した呪文をあらかじめ『貯めて』おき、咄嗟に発動する事が出来る。

---

ファラシオン「間取り的に間違いなく上だと思う。上に行こうぜ上。」

フドーリン「わかった。じゃあ先に上を調べてみるか。」

マスター「上に行く？なら全員<隠れ>のロールで」

フドーリン「もちろん、アリオンが先行するんだよ」

マスター「階段を登って、途中で気がついたんだけど、ここに兵士がいる。(図 4 緑玉砦本陣内参照)」

ファラシオン「途中でアリオンが気づいて立ち止まったんだな。」

アリオン「兵士が一人こっちに向かってくるわ」

バッカニア「何い？『眠り』しかないな」

アリオン「やっちゃう？(笑)」

フドーリン「俺らに毒されたか」

バッカニア「でも、一撃で何とかしないとな・・・物音立てられると困るしな。」

フドーリン「じゃあ、俺もダガー持ってるから、チャクラムと一緒に投げてそれでもダメだったら『眠り』で」

ファラシオン「これで間違いなく2階にある事がわかったな」

バッカニア「そうか？」

ファラシオン「2階がただの部屋だったら見張りなんかいるわけないじゃん。」

フドーリンのダガーとアリオンのチャクラムによる一斉攻撃。アリオンのチャクラムで致命傷を与え、更にフドーリンのダガーでダメージを与えたが倒すには至らなかった。更にファラシオンの眠りも失敗してしまう。

マスター「40%の確率で叫ぶよ。誰か振っていいよ。」

ファラシオン「お前やれよ (→バッカニア)」

バッカニア「ひどいなあ。無責任な奴(笑)」

バッカニアのロールは幾分怪しかったが成功した。

マスター「そうすると・・・この兵士は叫ばなかった。」

ファラシオン「じゃあフドーリン、抑えこめ。」

フドーリン「そうする。」

フドーリンの抑えこみは成功した。

フドーリン「騒ぐな。」

廊下には合計3つの扉がある (図 4 緑玉砦本陣内参照)

と、その時・・・

マスター「さて、ファラシオン。君の持つ短剣が少し熱くなったよ」

フドーリン「何？」

ファラシオン「手前のドアに近づけてみるよ。」

マスター「ならない。」

ファラシオン「じゃあ反対側の扉に」

マスター「あー、もう凄く熱くなった。」

ちなみに、外から見た限りでは手前の部屋には明かりがつかっていた。

ファラシオン「じゃあさ、熱くなった部屋の扉をアリオンに探してもらおう。で、俺たちは向かいの扉を警戒してる。俺は『雷弾』の杖を構えて雷弾を打つ準備」

しかし、この状況でアリオンは失敗する

アリオン「ごめん。何もわからなかった。」

フドーリン「俺は武器を構えていよう。」

バックニア「ファラシオンは向かいの扉を警戒しているんでしょ？じゃあ俺は後ろを警戒するよ。」

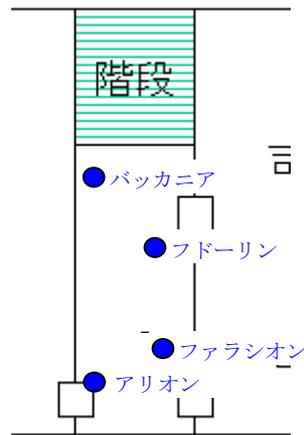


図 5 警戒するトコとしないトコ

マスター「てことはこっち（奥の光の消えていた部屋）を警戒している人はいないわけね？」

ファラシオン「・・・そう言われると警戒したくなる(笑)」

マスター「おーそーい。知覚ロールをしてくれ」

フドーリンのみが成功となる

マスター「人の気配をここ（奥の光の消えていた部屋）に感じる」

フドーリン「あそこに人の気配を感じる」

ファラシオン「じゃあ、向きを変える。でもこんなところで『雷弾』を撃ったら大騒ぎだな。」

マスター「ガタッと音がしてドアが開いた。そして、ローブを着た人影が出てきてー」

ファラシオン「じゃあ、やるか！」

マスター「発射ーッ！」

ファラシオン「え？もうできるの？」

マスター「君と同じ事をやっていたって事だよ。こいつが撃ったのはー（魔法選択中）」

ファラシオン「げっ、こいつすげー強いんじゃないの？」

マスター「『死の雲』。いや、それはやめよう。」

ファラシオン「何まで使えるんだよ？何レベルなんだよ」

マスター「10 レベルだけど・・・(プレイヤー引く) 嘘、嘘だって(笑)<sup>20</sup>・・・じゃあ、『火球』<sup>21</sup>にしよう」

バックニア「いや、すげえの出てきたなあ。手加減してくださいよ～」

フドーリン「せっかくここまで来たのに。」

マスター「うん。俺もそう思う。」

<sup>20</sup> まあ、実は少しも嘘じゃなかったんだが、後述するがこれがアマーギン。

<sup>21</sup> 英語で言うとファイアボール。効果も推して知るべし。爆発を引き起こす魔法

---

---

## 第7章 結果的に一撃必殺

ファラシオン「イニシアチブ、イニシアチブ！」

マスター「え！？ああ、そうだね・・・」

ファラシオン「クリット出せ、出せ。ここで出せ！頼むう～」

ところがこのイニシアチブ。謎の襲撃者の出目が 14 だったため、こぞってキャラクターにイニシアチブが取られることになる。

フドーリン「ここまで来たら、もう殺すしかないな。」

ファラシオン「殺ッチマイナーーーーー！<sup>22</sup>」

フドーリン「斧で。」

ファラシオン「ここで殺さなきゃ死ぬぞ。マジで。」

バッカニア「往生せいやあ！」

と、バッカニアが攻撃。17 点のダメージを与え、痛打は・・・96 と高スコア

マスター「・・・」

バッカニア「何だそのすっぱい顔は(笑)」

フドーリン「+5つけたのお前だぞ！」

マスター「腹部に突き刺し、打撃+10、毎ラウンド打撃8、行動力-10、4ラウンド麻痺！！」

バッカニア「終了～」

フドーリン「で、その顔見た事ある顔かな？」

マスター「もちろん、アマーギン」

ファラシオン「師匠・・・俺は、杖を取り落とした、カンラララン・・・(笑)」

アマーギン「流石ですね・・・」

フドーリン「とりあえずバラールを抑えるか。」

マスター「まあ、あと2ラウンド位で死ぬけどね。」

バッカニア「止血帯って使えないの？」

フドーリン「俺持っていないよ。」

ファラシオン「ああ、死んじゃう。吐かせたいのに・・・アリオンにとりあえずその扉を開けてって言う、俺は反対側のドアを警戒してるよ。」

マスター「開けた・・・アリオン。」

バッカニア「どうなってる中は？」

マスター「そうすると、アリオンがザッと飛び退った。見るとバラールがドアを開けた人に攻撃している」

ファラシオン「フドーリン。師匠はもうダメだ！バラールを倒すのに専念するんだ」

フドーリン「それはいいんだが・・・俺はバラールに脅すよ「剣を置けバラール！アマーギンを殺すぞ！」」

バラール「知らん・・・」

マスター「と言って攻撃してきた。」

しかし・・・

マスター「ファンブルしちゃったよ～(笑)」

バッカニア「しまらないなあ～(笑)」

マスター「(ファンブルの結果)足が滑った。魔法のかかっていない武器は壊れた！」

---

<sup>22</sup> ルーシー・リューの声で、『キル・ビル』より。ちなみに、AVで『チク・ビル』ってのがあったなあ・・・そんな事はどうでもいい。

フドーリン「目が見えないというのは不便だな！バラール！」  
 バラール「おのれえええ！」  
 バッカニア「殺っちまいますか？こいつ？」  
 フドーリン「俺はやる気マンマンだからね。」  
 ファラシオン「師匠の止血がしたい〜」  
 フドーリン「俺なんか師匠放り出してるから」  
 ファラシオン「あわわわわ(笑)」

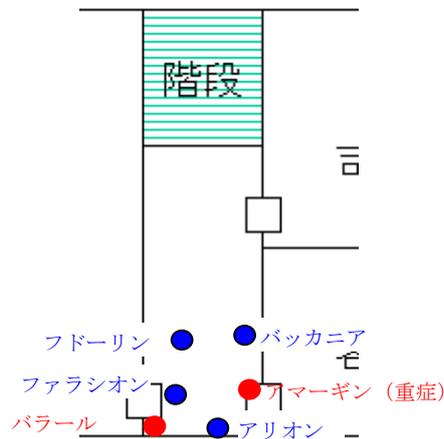


図 6 アマーギン・バラールとの対決

バッカニア「じゃあバラールぶん殴るか」  
 ファラシオン「バラールよくも師匠に！って」

さて、バラールとの戦闘開始。まずはイニシアチブから。まずファラシオンが取得した。

ファラシオン「おのれバラール！まずは『雷弾』の杖！！(笑)」  
 マスター「与えなきやよかったよ・・・」

『雷弾』による攻撃は8点のダメージ。しかし、痛打のサイコロは・・・

マスター「髪の毛が逆立つ・・・(笑)」  
 ファラシオン「これは師匠の分！！(笑)」  
 バラール「その割には大して効かないようだな。」

続いてバッカニアの攻撃。19点のダメージを与え、痛打は・・・またしても高スコアの@  
 104

マスター「腹部に重症・・・(以下略)」

続いてフドーリン

フドーリン「俺はもう斧を止めるつもりはないから・・・攻撃」

この攻撃はまたしても大ダメージを与える。痛打も・・・

マスター「・・・やべえ、やべえな。」

---

バックニア「とりあえず言ってみ？修正は受け付けるから」  
マスター「腹に突き刺さり即死、武器が抜けなくなる可能性 25%(笑)」  
ファラシオン「ボスキャラに即死は通用しないんだよ」  
フドーリン「あきらめろバラール」  
マスター「まあ、即死はいいんだが、その内死ぬなあ。・・・じゃあバラールもアマーギンも最後ッ屁をかますことにしよう。バラールはフドーリンに邪眼をぶちかます！」  
ファラシオン「やめてくれー」

抵抗は失敗してしまう。

フドーリン「く、苦しい・・・」  
マスター「今度は君たちも傍にいるから分かるんだが、フドーリンが倒れたと思ったら、フドーリンの衣が裂けてー」  
ファラシオン「何事だこれは!？」  
マスター「巨大な獣に変身した!」

## 第8章 お約束のリミッター解除と大爆発

ファラシオン「あ・・・あ・・・あああああ(笑)」  
マスター「アマーギンはそれを見て驚いている」  
バックニア「アマーギン最後ッ屁撃つ暇あるのか?(笑)」  
アマーギン「まさかピヨルン族とは・・・だが、一人では死ぬわけにはいきません」  
マスター「と言ってアマーギンが指を鳴らした。知覚ロールしてみて。」  
フドーリン「俺は？」  
マスター「君はダメ。」

知覚ロールにはファラシオン、バックニアとも成功した

マスター「外のエメラルドの塔が激しく点滅を始めている」  
バックニア「エメラルドの光が！あ、あ・・・ああああ・・・」  
マスター「でもって、こっちは、床が抜けた！」  
バックニア「熊のせいだろうな。」  
ファラシオン「でも、下の兵士をやっつけてもらった方がいいな。」  
マスター「いや、意識はないのでコントロールできないよ。ファラシオンに攻撃するかもしれないけどいいかな？」  
フドーリン「俺が決められるところではないから」  
ファラシオン「じゃあ！アリオンはさっきの部屋で剣を探してくれ」  
アリオン「あったわ」  
バックニア「早いな(笑)」  
アリオン「机の上にあったわ。ただ、私一人では持てない！」  
バックニア「よし、じゃあ手伝おう！」  
マスター「でもってフドーリンなんだが、手当たり次第に攻撃するんだがー」  
フドーリン「下の部屋に兵士とかいなかったの？」  
マスター「下にいた4人の兵士が剣を抜いてかかってこようとしている」  
バックニア「偉いな。俺たち上から見てるんだけど。」  
マスター「攻撃していいよ。攻撃ボーナスは95の爪(笑)」

この攻撃の結果、一人の兵士をあっさりとふっとばす。

---

マスター「太ももへの痛打なんだけど足がもげたことにしよう。まあ兵士を一人ふっとばしたってことで」

バックニア「もろい種族だ・・・<sup>29</sup>」

ファラシオン「本当にフドーリンなのか？こいつは・・・」

マスター「建物ももう崩壊しているから運動ロールしてくれ。失敗するとすっ転ぶ。」

運動ロールの結果、ファラシオンが転ぶ

ファラシオン「あ痛！あいたた、俺に構わず行ってくれ！(笑)」

アマーギン「まもなく、この砦は爆発します・・・私一人は死ぬわけにはいかない」

ファラシオン「師匠あなたは！・・・(何を言おうかな)・・・心までサウロンに売り渡してしまったのですか！？」

アマーギン「ファラシオン、貴方は本当にダメな弟子でした。」

ファラシオン「・・・まあ、それは否定しないが(笑)私はあなたに追いつきかかった。」

アマーギン「ならば、早くサウロンの軍門に・・・ぐふっ」

マスター「アマーギンは亡くなった(笑)」

バックニア「サウロンに心を売り渡すような奴に説教されてもしょうがないってことだ。」

マスター「お前が言ってもな・・・それがロールプレイって奴だ」

ファラシオン「本当に死んだのかな？」

フドーリン「とりあえず俺は兵士を攻撃してるよ(笑)」

マスター「仲間を攻撃する可能性があるんだけどな・・・」

ファラシオン「お前は何をやってんだ！？」

マスター「とりあえずサイコロ振って」

フドーリン「(振る)」

マスター「また大ダメージ与えて、兵士をふっ飛ばした」

バックニア「もう、そんな処理なんだ」

バックニア「ここって爆発するんじゃないか？」

ファラシオン「師匠・・・崩れゆく館に気づかずに・・・(笑)」

バックニア「後でぼーっと立ってるよ」

アリオン「何をしてるの！？ここはもう持たないわ！早く行かないと！」

ファラシオン「わかった。じゃあ、黙って立ち上がるよ」

バックニア「よし、行くぞ！」

マスター「じゃあ、君たちは混乱の最中脱出をする」

バックニア「おい、この砦はもうすぐ爆発するぞ！お前らも死にたくなかったらとっとと逃げるんだな！と叫びながら門から出るよ」

マスター「そうだね、本陣や錬兵場からわらわらと兵士が出てきて、エメラルドの塔の異常に気がついてるから」

フドーリン「おれは一人だがああーって、兵士ふっ飛ばしてるから(笑)」

バックニア「エメラルドの塔ぶっ壊してくれないかなあ？」

ファラシオン「じゃあ俺はエメラルドの塔の近くで、おおーい！こっちだよお、馬鹿熊があ！(笑)」

マスター「気づいたよ、そっちに向かうよ。」

ファラシオンの機転により、正体不明の獣（熊？）の攻撃を行うが

---

<sup>29</sup> これは何を言いたいのか不明。明らかに他のプレイヤーが喋っている言葉が多いのだが、こんなのばっかし

---

フドーリン「死ぬよ当たったら？俺が言うのもなんだけど(笑)」

マスター「エメラルドの塔はぼっくりと折れて、倒れた。しかし、頂上部の巨大なエメラルドは輝きは衰えない」

バックニア「だ、ダメか・・・」

マスター「そうすると、そろそろ抵抗ロールをしていいよ。精気抵抗ロール」

しかし、失敗してしまった。

フドーリン「眠らせてくれよお」

ファラシオン「とにかく爆発に巻き込ますのもかわいそうだから、門から出ようぜ。こっちだよーお！(笑)」

マスター「『何だあの化け物は！』って兵士が驚いてるよ」

バックニア「みんなが逃げる方向に誘導する。いいからお前ら早く逃げろ！」

フドーリン「じゃあ俺は手近の兵士を攻撃(笑)」

バックニア「何人吹っ飛ばかサイコロで決めようぜ(笑)」

ファラシオン「三国無双になってきたなあ<sup>24</sup>門から出たら身を隠すよ」

マスター「門から出ると、ドーン、という音がしてエメラルドが大爆発した。(元)フドーリンは直撃を受ける(笑)」

バックニア「この衝撃で元に戻るとかないのかな。」

爆発によってダメージを受け、抵抗ロールを再度試みたが、またしても失敗してしまう。

マスター「まだ、ダメだな。」

フドーリン「がああああああ！」

バックニア「あれはいつになったら元に戻るんだい？」

ファラシオン「うーん、わからん。」

フドーリン「破壊、破壊、破壊・・・」

そろそろ收拾がつかなくなってきたので、展開をさせる事にする。

マスター「さて、君はアリオンと共に持ち出した黒い剣を持っていたんだが、気がついたら構えてた。そしてそのまま獣に斬りかかる！」

ファラシオン「あ・あああああああ・・・何やってんだバックニア！」

バックニア「体が勝手に動くんだよ！」

バックニアの攻撃。+50 という大量のボーナスを持つ攻撃は熊に致命傷を与える。

マスター「48 点のダメージに痛打。それから痛打・・・顎への一発」

バックニア「俺の意志じゃねえんだよおおお！」

マスター「すると、限界までのダメージを受けて、倒れてフドーリンは元に戻った。で、フドーリン・・・」

フドーリン「アッパーリングを受けたんだな」

マスター「54 点のダメージを受けて、2 ラウンド麻痺して毎ラウンド打撃1 となる。」

フドーリン「はい。瀕死だな」

バックニア「わああああ、フドーリン大丈夫かああ！？」

フドーリン「お前がやったんだけどな。」

マスター「で、黒い剣の方は元の重さ戻る。構えていられなくなる」

---

<sup>24</sup> 雑魚を蹴散らすのが爽快感な光栄のPS2ゲーム。最新版は『真・三国無双4猛将伝』が9月に発売される。しかし段々キャラ作りが婦女子向けになってきたために微妙になりつつある。それでも蹴散らす爽快感は相変わらずなので何だかんだで買い続けている。

---

バックニア「ぬおおお、何だこの剣は！？というわけでしょうよ」

マスター「いや、取り落とす。」

ファラシオン「何だったんだ一体・・・」

アリオン「早くフドーリンを手当てしないと！薬草はもってるでしょ！」

ファラシオン「(笑)で、でも止血帯が・・・」

アリオン「じゃあ私のをを使うわ」

慌ててフドーリンの手当てをする。

ファラシオン「フドーリンは気を失ってるの？」

マスター「いや、失っていないよ。尋常じゃないダメージを受けているけど」

フドーリン「畜生！バラールめ！」

ファラシオン「フドーリン！お前覚えていないのか？」

フドーリン「何を？」

ファラシオン「これを見ろ！この砦を！これ全部お前がやったんだよ！」

バックニア「全く・・・」

マスター「大きなクレーターができてるんだけど。」

フドーリン「こんなクレーター俺が作ったのか！？(笑)」

バックニア「それは多分エメラルドのせいだと思うんだが・・・」

フドーリン「で、俺のカチ割り丸は？」

ファラシオン「あ(笑)」

フドーリン「カチ割り丸ううう～、捜していい？」

ファラシオン「で、エメラルドは粉々なの？」

マスター「もちろん」

ファラシオン「捜してみるよ」

フドーリン「俺はカチ割り丸」

知覚ロールを行い、ファラシオンは成功したがエメラルドの小さな欠片を見つけたのみであった。フドーリンは何とか無事にカチ割り丸を見つけることができた。

マスター「ついでに言うと、アマーギンの死体が見つかった。アマーギンの死体の近くに転がってたよ」

フドーリン「カチ割り丸、よかったあ～」

バックニア「バラールの死体は？」

マスター「いや、見付からなかった。」

ファラシオン「『師匠・・・』俺は師匠を抱き上げてー」

フドーリン「ところで誰かパンツくんねえか？(笑)」

ファラシオン「うるせえよ！(笑)お前いっそそのままにいる、お前アリオンの前でもそのままいたのか？」

マスター「アリオンはなるべくその方を見ないようにしていた(笑)」

バックニア「思うに、こいつに合うサイズのものはないと思うな。」

フドーリン「まあ、いや。何とかする」

マスター「さて、これでー」

ファラシオン「ちょっと待て、まだ師匠を埋める作業が残っている。で、俺は死体の体なんか探らないけど、運ぶ過程で何かに気づくこともあるかもしれないね！(笑)」

マスター「探ってる探ってる。で、埋めたよ。で面白そうなものは見付からなかった、全部壊れてる」

ファラシオン「師匠の墓・・・と。語るに堕ちた人だったが私の師匠だった。」

フドーリン「バラールを仕留めそこなったか、あれだけのダメージを与えたのに。」

バックニア「やはり奴は生きているのか！」

---

フドーリン「しかし、奴は大した事ない。一撃で死ぬから」

ファラシオン「お前が異常なんだよ。」

バックニア「今回ファンブルしちゃったしな」

マスター「さて、というわけで砦から黒い剣を持って脱出し、この後はロリエンに向かうことになりました。おしまい。」

謎の黒い剣をきっかけとして、ファラシオン達の運命の歯車は回りだした。後に『指輪戦争』と呼ばれる中つ国全体を巻き込む戦乱の嵐の中で彼らも避ける事のできない激しい戦いに飲み込まれていく事になる・・・

---

---

## 次回予告

黒い剣の奪還には成功したもののそれは闇の勢力との戦いに巻き込まれる事を意味するものであった

しかし希望は失われたわけではなく、光の勢力もまたファラシオン達を助けることになる

黒い剣を狙う黒の乗り手や大鳥  
ファンゴルンの森の守り手達  
そしてあの賢者が！

ACRAP 提供 LOTRRPG  
第3回『エルフの巫女』！  
乞うご期待！

---

---

## シナリオ作成メモ

いやー、第2部ですが（つमり的には第1部後半なんだけどね）、やっぱりボリュームが増しておりリプレイの製作に時間がかかりました。まあどうせこうなるとは思ってたけどね。年内に全6回終わるか怪しくなってきました。

そこで（というわけでもないのですが）せつかくオマオマ（＝オマージュ）言っているのだから、原作と比較しつつシナリオの作成メモを残しておこうと思い、このコーナーを作りました。でめんどいのでキャラクター紹介はあまりしない。

今回は大きく3つに分かれています。メル村の救出、バラールの襲撃、緑玉砦への潜入です。それぞれに分けて何を考えてシナリオ設計したのか、そして実際はどうだったのかを語りたいと思います。まあその前に第1部の流れからフォローしとかなとな。

第1部ですが、ACRAPといえばよくあるのがシティアドベンチャーですが、残念ながら指輪物語の本質は冒険であり都市ではないだろうと考えました。そこで野外の冒険しかも追跡行です。これも実際は追う追われるの差はあるものの、第1部の裂け谷までの旅をオマしました。

クライマックスでは任務とアリの命の葛藤をPCに迫ったあたり、マスター冥利に尽きるところ。中々これはできないからねえ。

それからコアコンセプトである黒い剣ですが、安直ではあります。ただ、第3部以降登場する白い剣と合わせることによって光と闇の戦いの象徴化ができるなあという位は考えてます。これからどうなるかはあまり考えていないけど。

さて、今回のシナリオの解説に移ります。まずはメル村襲撃。これはTRPGではオーソドックスな展開ですね。とはいえ、サルマン配下のオークが活性化している事をPC達に実感させたいと思って用意しました。しかしオーソドックスすぎてあまり伝わりませんでした。とはいえ、正道には正道なりの楽しみがあるってことで三国無双気分ができて楽しかったのではと思っています。ちょっとオーク弱すぎた orz

次のバラールの襲撃ですがこっちは純粋にバトル物を用意するという意味がありました。TRPGにおいては戦闘システムは確立しているものの、ジョジョみみたいなトリッキーな戦闘はなかなかできません。そこで野伏というバラールの職を最大限に活かし『どこから撃たれるかわからない矢』を用意しました。これは個人的には非常に気に入った展開になりました。ただPCはストレスが溜まったかもしれませぬ。中々知覚ロールに成功しないから。ちなみに、次でも同じ事をやろうとしてやや失敗しました。

緑玉砦への潜入はとりあえず設定だけ用意して潜入方法はPCに任せるという設計にしました。その気になればいくらでも潜入方法はあります。ただ、この設計の難しいところは今回のようにいきなり核心に行ってしまうところですね。とはいえ、なるべく合理的、不自然でない設定にすることがあります。しかしそれに頼りすぎると魔法で一発解決するのがファンタジーRPGの難しいところ

さて、次回ですが既にプレイは終わっていますがやりたかったのはダンジョン。お楽しみに。